

平成8年度
公開講座概要

総合研究所が担当する平成8年度公開講座は、文化講座、社会学部公開講座、桜井市生涯学習シリーズ奈良大学教養講座、都祁村生涯学習シリーズ奈良大学教養講座の四講座を、前年に引き続き開催した。

近畿文化会と共催の文化講座は17年目を教え、「大和への旅、大和からの旅」をテーマに開催、受講申し込み者は203名で、全5回の講座に、延べ726名の受講があった。桜井市、都祁村の教養講座は、それぞれの教育委員会との共催で実施し、地元の希望を尊重して地域に密着したテーマを中心に開催した。桜井市教養講座では、190名の申し込みで、延べ633名が受講し、都祁村教養講座には81名の申し込みで、延べ264名の受講があった。

また、8回目の社会学部公開講座は、「希望とは忘れないこと」－阪神・淡路大震災とボランティアを考える－をテーマに開催し、約100名の聴講があった。

桜井市生涯学習シリーズ
奈良大学教養講座

私たちのまわりに目を向けよう
一郷土を学び新しい時代を知る一

5月12日

隊商都市パルミラの発掘

泉 拓 良

今から約2,000年前、中東シリア砂漠の真中のオアシスにある隊商都市パルミラは、シルクロード交易による莫大な富を得た。その富は、一時的にはあれ、トルコからエジプトまでを手にいれたほど巨大であった。そして、パルミラの名は、後漢時代の中国にまで知られていたとも言う。しかし、その栄華も、紀元273年、女王ゼノビアによるローマ帝国への反乱で、終りを告げた。今パルミラは、中東で最も美しく、かつ当時の廃虚がそのまま砂漠の中に残っている遺跡として著名である。

私たちはシルクロードの栄華を求め、1990年から奈良県を中心に、このパルミラ遺跡で発掘調査を行ってきた。パルミラ人は来生を信じ、宮殿の様に立派な一族の墓を造る習慣があった。

我々はそのような墓の中から、盗掘されていない可能性のある地下に造られた墓、地下墓に狙いを定めて発掘調査を行っている。第一期の調査では、紀元109年にイアルハイが造った地下墓の発見と発掘に成功し、現在実施中の第二期調査では紀元128年にボルファとボルハの造った地下墓の発掘を行っている。イアルハイの地下墓は全く盗掘を受けていない地下墓、ボルファとボルハの地下墓はパルミラで最も美しく飾られた地下墓と、シリアに限らず、世界的にも高く評価されている発見である。その発掘調査の概要と、日本とは少々異なる現地での生活を紹介した。

6月9日

つばきいちのうまや

水野 柳太郎

のちには樺市と記されるつばきいちが、日本の史料に表れる最古の市場であることは、桜井市のかたがたには周知のところである。そこには、6世紀末にうまやが置かれていた。うまやは、馬屋・駅・亭・駅屋・駅亭・駅館・駅舎などと記され、訓読すればいずれも「うまや」である。一般の交通に関係するとされ、宿屋のように理解されることが多いし、馬小屋と誤解されることさえあった。このうち、「駅家」がもっともその性格をよく表していて、郡家のように郡の行政機関、寺家のように公的組織を示す場合に「家」が用いられた。

うまやの施設は、一般の旅行者の便宜のために設置されたのではなく、駅伝制による情報の独占を通じて古代国家が全国支配を貫徹するために設けられた、国家の支配機構のひとつである。この観点から、難波から飛鳥に至る舟運の終点であり、大和盆地から東国への出口に位置したつばきいちのうまやに関する史料を再検討して、その性格や変遷を明らかにし、つばきいちのうまやがもつ意味を考えてみた。

7月14日

どう変わる私達の生活

— メディア社会に臨んで —

湊 敏

私達は、“マルチメディア”という言葉が新聞やテレビで見たり聞いたりすることが最近多くなってきている。さて、このマルチメディアという言葉はいったい何を意味しているのだろうか？少なくとも、私はこれまでの学校教育で学んだ記憶はない。マルチメディアという言葉を使用している人は、この言葉で何を意味しようと思っているのであろうか？また、彼等は、この言葉を受け取る人はマルチメディアという言葉の意味を知っていると思っているのであろうか？私は、“マルチメディアという言葉が何を意味しているかは知らない”と自信を持って言える。

現在は、この意味不明のマルチメディアが私達の生活に浸透し、私達はマルチメディア社会を迎えると言われている。マルチメディア社会を迎えるにあたって、私達は、私達の生活がどのように変わるのか、どのような準備をする必要があるのかを考えてみる必要がある。

この教養講座では、マルチメディアという言葉が何を意味しているのか、またマルチメディア社会を迎えるにあたって私たちは何をすればいいのか考えてみた。

9月22日

桜井のほとけたち

— 仏像から学ぶもの —

光 森 正 士

仏教美術と称される、仏教から生れた幾多の文化財のうちにあつて、仏像はやはりその中心的な存在をなすものといえよう。

わが国へ、仏教が公伝したとき、最初にもたらされたものは金銅釈迦仏像であり、他に幡蓋と経論若干があつたという。仏像の存在がいかに重要であつたか十分に理解されよう。桜井も古代から仏教と深縁の地であるが、わが国最初の本格的仏教寺院としては飛鳥寺（僧寺）、豊浦寺（尼寺）が名高い。これら古代寺院でその伽藍の中核をなしたのは仏塔であり、金堂である。仏像が安置され礼拝されたところは金堂である。いわば金堂こそは仏像の占有空間であり、講堂などに仏像が安置されるようになったのはかなり後のことである。

仏像の調査や研究というと、最近ではこの作者やその様式、はたまた素材や製作技法などが問題視され、その仏像は元来、どこに、どのように安置され、どのような作法や儀礼をもって礼拝され、どのように信仰されてきたかという肝要な問題についての十分な検討はなされていない。

仏像というものが仏教を母胎として生れたものであるのに、仏教そのものが顧みられず、いうなれば仏教不在の仏像研究となっている。先に挙げた諸点を深く考慮しつつ仏像の探究することこそ、真の仏像の学び方といえるのではないだろうか。

11月17日

ストレスとこころのケア

東 山 弘 子

現代の社会は、先端技術と情報のはげしくめざましい発展によって急速な改革をとげつつある。多くの面で、人々の生活は信じられないくらい効率よく、便利で生活しやすい方向へと進んでいるが、一方では、技術発展・情報過多によるストレスが増大し、こころの健康にとってのデメリットも出始めている。働き盛りのストレス関連疾病や、うつ病、神経症が増加し、長寿社会の到来は「30にして立つ。40にして惑わず。50にして天命を知る。」という人生の図式

の変更、価値観の変更を余儀なくさせている。

このような現代社会の事情と人生において避けることのできない対象喪失体験がひとびとのこころのストレスを深め、誰もが深刻なこころの危機に出会わざるを得ない状況にある。このことを深刻に受けとめる局面から、これからの新しい社会にふさわしい生き方が生まれてくるのではないかと思われる。

1月12日

大和青垣の東 — 万葉集の桜井 —

上野 誠

『万葉集』の世界は広く、そして深い。

万葉集には天皇から名も無い庶民に至までの多くの人びとの〈うた〉が4516首も収められています。現代人である我々は、この書物を紐解くことによって、1200年以上もの昔に生きた人びとの「声」に直接ふれあうことができるのです。わたくしは万葉集を、古代人の生活心情を伝える「言葉の文化財」とであると、現在考えています。今回の講座では、大和の東の壁たる桜井、つまり「大和青垣の東」の万葉歌をじっくり読んでみました。日頃、受講生の皆さんが眺めている桜井の山や川を万葉びとはどのように表現しているのか・・・うまさけ三輪の山の麓で、声高らかに万葉を講じてまいりました。

2月16日

日本の真の平和構築は

大村 喬 一

平和憲法をもっているから、何もしないで世界平和に役立っているとの考えは錯覚である。現にいま世界には50をも超える熱い戦争が行われている。真の平和は何もしないで到来するものではない。真の平和の構築は地道な息の長い努力を必要とする。日本の安全保障にもっとも重要な要因は中・米・朝鮮半島及びロシアとの関係であるが、中国は台湾を廻って緊張状態にあり、朝鮮半島ロシアも夫々内部攪乱要因をかかえており、また対米関係も経済摩擦を廻って必ずしも穏かではない。国家だけではなく民間のあらゆるレベルでの親密な関係を打ち建てるのが急務である。

3月9日

人は何を求めるのか？

— 魂の苦悩 —

市川良哉

人はその人生で、何んらか危機的な状況に直面しなければならない。一口に危機的状況とはいってもいろいろな場合があり得る。人が生命を絶つというのはこうした危機を、よほど心に悩むことがあって超え得られなかったからに違いない。そうした場合、深刻なのは自己の生存の意味が見出せない「魂の苦悩」である。人は何を求めて生きているのか。改めて生きる意味が問われている。

魂の苦悩を癒すものは何か大きなもの—神の生命あるいは仏のいのち—に生かされるということ以外にはないのではないか。ある仏教経典はこういう話を伝えている。古代インド・マガタ国のアジャセ王が父王を死に到らしめたことに深刻に苦悩し、身体中に瘡（かさ）を生じる。心配する母后にこの瘡は後悔の心の苦しみから生じたもので、身体の病ではないと話し、生きることの意味をめぐって魂を病んでいる。それを癒すのは唯物論や宿命論ではなく、心の医師としての釈迦の教えであった。

大きないのちに生かされるような生き方は魂の苦悩をどのように癒すのか。そこにどのような境地が開かれることになるのか。宗教的生とはどのようなものなのかということを考えてみた。

都祁村生涯学習シリーズ

奈良大学教養講座

生活文化を考える —ゆとりと豊かさを求めて—

5月26日

生きることの意味

— 現代人と宗教 —

市川良哉

人はその人生で、何らかの危機的な状況に直面しなければならない。一口に危機的状況とはいってもいろいろな場合があり得る。人が生命を絶つというのはこうした危機を、よほど心に悩むことがあって超え得られなかったからに違いない。そうした場合、深刻なのは自己の生存の意味が見出せない「魂の苦悩」である。人は何を求めて生きているのか。改めて生きる意味が問われている。

魂の苦悩を癒すものは何か大きなもの——神の生命あるいは仏のいのち——に生かされると

いうこと以外にはないのではないか。ある仏教経典はこういう話を伝えている。古代インド・マガダ国のアジャセ王が父王を死に到らしめたことに深刻に苦悩し、身体中に瘡（かさ）を生じる。心配する母后にこの瘡は後悔の心の苦しみから生じたもので、身体の病ではないと話し、生きることを意味をめぐって魂を病んでいる。これを癒すのは唯物論や宿命論ではなく、心の医師としての釈迦の教えであった。

大きないのちに生かされるような生き方は魂の苦悩をどのように癒すのか。そこにはどのような境地が開かれることになるのか。現代における宗教的生とはどのようなものなのかということを考えてみた。

7月21日

ガン告知と人間の心理

大町 公

「ガン告知」は、かつての時代には、死刑の宣告のような趣きがあった。現代は医学の発達のおかげで、一部のガンは治るようになり、そのイメージも徐々に変わりつつある。

しかし、現代は4人に1人がガンで死ぬ時代でもある。われわれはもちろんガンにかからないように心がけるべきではあるが、同時にまたガンにかかったらどうするかをも考えておかねばならない時代に生きている。それと共に、「ガン告知」はもはや、すべきか否かではなく、いつ、誰が、どのように告げるかが問われる時代であると言える。

痛みのコントロールに関する医学の進歩とともに、脳卒中や心臓麻痺といった〈突然死〉よりも、〈ガン死〉の方を望む人達すら出てきた。そういう人達は、死を自覚して生きる時間がほしい、人生のしめくりをしたい、感謝の言葉、別れの言葉を告げて死にたいなどという考えに基づいている。

いくつかの「ガン闘病記」を参照しながら、告知を受けたときの人間の心理を考察するとともに、そこからどういう生きる方向があるのかを考えてみた。

8月25日 高齢化社会と「福祉のまちづくり」

桂 良太郎

社会福祉とは何ぞや。

社会福祉の歴史からなにを学ぶことができるか。

現代の高齢者福祉の仕組みと課題。

アジアの社会福祉から学ぶもの。

あすの私たちの町の「福祉のまちづくり」を目指して！

10月13日

国際社会への日本の役割

大村 喬 一

情報機器や交通網の発達によって、市民個人の能力は飛躍的に増大した。もはや市民は、国境に制約されることなく、自由に世界のあらゆる場所の市民・団体と接触し、意見交換を行い、統一行動をとることが出来るようになった。

これまで、国際社会の諸問題にとり組むことが出来たのは国家だけであったが、国家のもつ能力・資源だけで解決することは到底出来ないような拡がりを持つ諸問題が表面化しつつある。

今後の国際協力は、このような能力を市民と団体が、いろいろな分野で協力し、紐帯を保ちつつ、共に世界的な諸問題解決に貢献していくことが、真の国際協力と呼ばれるものにならう。

12月8日 私の「都祁村史」— 古代・中世 —

水野 正 好

都祁の古代・中世はまことに多彩。実に考えさせられることが多い。石造遺物をみても、寺社をたずねても、また、寺社の宝物を参観しても、そのたびに深い感銘をうける。感激のその一端を私なりの語りでつづりたい。

1. 都祁は古代・中世、非常に優れた文物をのこしている。奈良時代の貴神、小治田朝臣安萬侶卿の墓は、近くの弘仁天皇陵や太朝臣安萬侶卿墓と共に、この時代の風水の思想をうけた典型として著名。山・水と係わる神社としては都祁水分、都祁山口神社、地の神の社としては国津、葛、下部、雄神神社がある。古代・中世を彩る神々の社が並び建つ様子を窺うと都祁の饒わいが見えてくる。
2. 中世、牛頭天王の信仰が全国に爆発的にひろがる。京都八坂神社の神が牛頭天王。南海へ妻問いに赴く牛頭天王は巨旦将来宅で剣もほろろの扱いを受け蘇民将来宅では懇切なもてなしを受ける。妻、波梨采女と八人の王子をひきつれての帰途、蘇民将来に福と繁栄を約束し、巨旦将来を滅ぼす。こうした牛頭天王は強力な行疫神である所から、牛頭天王、八王子、その眷属、八萬四千六百五十四神王を祀ることで災厄からまぬがれようという願いが生ずる。都祁小倉・上深川の八柱神社はそうした社の一つ。
3. 都祁蘭王の青龍寺の本堂斜め前に立派な宝篋印塔が建つ。高さ2.2メートル、供養追善の想ひの深さを見事に語る立派な塔。南之庄の歓楽寺、その境内にも同様な想ひを語る地藏石仏や五輪塔が見られる。そうした中で何といても庄巻は、針の観音寺の十三重石塔。その財を傾けての造塔はこの地の篤い信仰を雄弁に物語る。相河薬師堂の阿弥陀三尊の石柱や十三仏石碑は極楽往生を願う人々の熱い想ひを現し、来迎寺はその寺名の通り、来迎をうけて彼岸に到りたいと願う人々に係わる重要な一寺であったことを物語る。
4. 針の観音寺、吐山の下部神社には大般若経六百巻がのこされている。村々を襲う災厄を祓

ひ、雨天・旱天にもしばしば読誦された経だけに、中世の災厄への怖れとその信仰による抑えが如何ほどこの地で強かったかを教える。萩の旧安穩寺十九夜講石仏は、いま移されて萩の墓地参道入り口に置かれている、女人安産祈願の十九夜講の本尊である。産を怖れ、苦しむ女人救済の如意輪観音像であり、都祁の女性史を語る大切な文化財である。

2月23日

王朝文学と長谷寺

山本利達

「観音^{しるし}を見する寺、清水石山長谷の御山……」と梁塵秘抄に歌われ、今昔物語集には長谷寺の観音のご利益の話が多く、「わらしべ長者」の話もその一つである。平安時代には、長谷寺への参詣者が多く、その参詣の記事は、王朝文学に色どりを与えている。

蜻蛉^{かげろう}日記の作者は願かけに一夜参籠したが、帰途、貴公子の夫に宇治まで迎えてもらう幸せを得た。3年後に父と一緒に参詣し、帰路は、木津から宇治まで船の旅を楽しんでいる。

源氏物語の夕顔の娘玉鬘は、3歳の時母の死も知らずに九州へ渡り、18年後京に上ったが、内大臣の父には会い手だてもなく、助けを願って長谷寺に参詣し、母の侍女だった右近にめぐりあう。右近は源氏に仕えていたので、その導きで源氏の養女となり、父にも会え、物語の重要人物となる。源氏物語終末部の女主人公浮舟は、薫と匂宮の愛に進退きわまり、入水を決意するが、物の怪にとらえられ宇治の院にいたところ、長谷寺参詣帰途の横川僧都の妹尼に助けられ、比叡の麓の小野で出家生活に入る。

夕顔や浮舟のようにと夢みながら、観音のお告げに耳を傾けず源氏物語を読みふけた更級日記の作者は、晩年には長谷寺に参詣し、信仰を深めるようになる。

奈良大学文化講座

— 大和への旅、大和からの旅 —

9月21日

旅中にたゆたう人々

— 近代文学 —

浅田 隆

奈良を舞台とする近代文学作品を概観するとき、必ずとまでは言えないにしても、多くの作品を通底する一つの傾向を見ることが出来る。私のこの話のテーマ「旅中にたゆたう人々」はそのような傾向に依っている。

「情緒のたゆたい」と言ってもよいし、「たゆたう情緒」と言ってもよい。とにかく、奈良を舞台とする近代文学作品の大半が、奈良を来訪した人々によって書かれているのであり、作家たちは奈良という空間に旅人として入りこんできた人々である。彼らはこの奈良という空間に漂う「情緒」に触れ、旅人としての思い入れによって奈良を見る。

近代とは東京を発信源とする機能主義・功利主義・合理主義などをどこまでも追求する時代であり、人々はいわゆる近代化・現代化を善として許容し、むしろこの動きに乗り遅れまいと努力し続けても来た。しかしこの、善として許容し評価した近代化・現代化は、人々に精神的な安定を与え得たか疑わしい。

そして、このような反省を抱いてしまった心は、奈良の風土の中にたゆたう情緒を精神の安息として求めたりもしたようだ。したがって、奈良という空間への旅中にある人々にとっては、現実の奈良は媒介にすぎず、それぞれの心の中にある思い入れを仮託して幻視する場でもある。

いくつかの作品を取り上げつつ以上のような傾向を紹介し、作中に描かれた情緒を味わった。

9月28日

大和の鉄道史

三木理史

奈良県の主要都市である奈良・郡山・天理・高田・御所・桜井等には、JR（旧・国鉄）と近畿日本鉄道（近鉄）双方の駅が存在する。そして、両者の位置関係は、①分離型（奈良・郡山・高田・御所）、②隣接型（天理・桜井）に区分できる。これに各々の都市の市街地中心の位置関係を加えてみると、JRの駅は総じて活気の無い町外れのなところに立地する傾向があるのに対して、近鉄の駅は旧来からの市街地に近いか、または周辺が市街地化しやすい傾向にある。こうした傾向を鍵として、奈良県の鉄道史を読み解いてゆく。その結果、つぎのような結論を得ることができる。JRと近鉄の駅が分離型で存在する都市は、近鉄線の建設が近鉄の直接の母体である大阪電気軌道（大軌）によって行なわれたものが多い。それに対して、隣接型で存在する都市は、近鉄線の建設が大軌への被合併会社によって行われたものが多い。したがって、そうした位置関係の相違には、大軌が日本最大の私鉄近鉄へと発展してゆく上での鍵も隠されているように思われる。

10月12日

弥生世界の旅

酒井龍一

私は常々、弥生時代（約2000年前）の地図づくりをしている。当時、日本全域のどこに様々な弥生集落が所在したのか、集落を結ぶ街道はどう伸びていたのか、主要な港はどこにあったのか、あるいは当時の社会の中心や都会はどこにあったのか、はたまた各街道をいかなる人・

物・情報が行き来したのか、等々。私が「弥生人の旅」をテーマに話をする場合、必ず大阪府立弥生文化博物館の所在する池上曽根遺跡（大阪府和泉市～泉大津市）の住人になりきることにしている。つまり弥生人が、池上曽根村を出発点として、実際にどの方向へ、どの街道を歩み、どの村を経由し、また何日かけてどの村まで旅をしたのか。復元の方法は、いわゆる「隣村の考古学」。私が発明した方法である。池上曽根遺跡の隣村はどこか。隣村の隣村は。はたまた隣村の隣村の隣村は。……。奈良盆地の有名な唐古遺跡への旅はどんなものか。遠くは当時の弥生社会の先進地＝北部九州への旅はどんな経路が考えられるのか。弥生人の様々な旅に思いを馳せるのが課題である。

10月19日

近世庶民の信仰と観光

鎌田道隆

江戸時代には、庶民の生活水準が向上し、治安は保たれ、交通施設の発達もめざましかったので、庶民的な信仰生活と娯楽観光とが結びついて急速な発展を示した。奈良の社寺や名所・旧跡をたずね、各地から多くの旅人が大和にやってきた。旅人たちは、大和のおだやかな自然景観や固有な習俗や著名な史跡に出会い、大和の特産品や人情を堪能した。

旅人を案内する多くの大和案内記や道中絵図が発行され、街道のいたるところには、行き先を示す道標が建てられ、道中の安全と夜間通行者のための灯火をかかげる燈籠などさえ造立され、また休息させ、湯茶を供する接待所も設営された。いずれも、旅人を迎える大和の人々の心がこめられていた。

いっぽう、大和の人々も、大和国内はもとより、伊勢や高野、京・大坂や中国・四国地方へもかなり気軽に、信仰と遊山の旅へと出かけている。おそらく大和の人々も、旅先でさまざまな出会いを体験し、あたたかな接待をうけたことであろう。そうした庶民の旅のひとつの姿が、大和国内におけるミニ西国やミニ四国の巡礼地形成にあらわれていること、それによって身体の弱い人や不自由な人々まで、信仰と小旅行の楽しみを得られるなどの工夫があったことも話した。

じつは、こうした旅を通じての庶民世界の広がりや、村境や国境をこえた日本的国民文化の形成に重要な役割をはたしたのではないかと考えている。

10月26日

お役人のご出張

水野柳太郎

古代の交通を問題にするとき、通常は駅伝制の解説に終わっていた。都と地方の連絡に駅馬と伝馬を配置したのは、政治上の必要からで、一般の交通に提供されなかった。飛駅は、一日

に150キロ以上の速度とされ遅れると処罰された。一般の民衆には得られない速度は、情報を支配者に独占させていた。都と地方を結んだ駅路は主要な交通路ではあったが、駅伝制は民衆とはかけ離れた存在であった。

最近では都と地方の間の私的な交通や、情報の交換に注目した研究があり、僧侶が、かなり自由に行動し、地方に布教をしていた事例もある。しかし、一般民衆については史料が少なく、実情はなお明らかではない。

今回は地方に派遣された古代官僚、駅使の姿をまず制度から、次いで万葉集から考えてみた。そこには、今日に似通った有様も認められる。

社会学部公開講座

希望とは忘れないこと

— 阪神・淡路大震災とボランティアを考える —

○スピーカー

『避難所と地域コミュニティ』 元魚崎小学校復興対策本部長 高砂 春美

『いのちをつなぐ希望の歌』 (財)たんぼぼの家 小園 優子

○コメンテーター

「社会福祉学」の立場から 奈良大学社会学部助教授 桂 良太郎

「社会心理学」の立場から 奈良大学社会学部助教授 矢守 克也

◇司会

桂 良太郎

□日時 1996年10月5日(土)午後1:30から4:00

場所 奈良県文化会館(第1・2集会室)

◎参加者 96名(市民70名、学生:26名(奈良大22名天理大3名奈良女子大1名))

阪神・淡路大震災から、1年半、被災地では、早くも震災の記憶「風化」が叫ばれている。あの、ボランティアの高まりも一時的なものだったのであろうか、そうであってはならないはずである。今回の公開講座では、ボランティアの最前線で活躍しているパネラーを迎え、市民とともに考えることをねらいとした。今回の公開講座のテーマは、社会心理学(矢守)と社会福祉学(桂)の合同企画によってなされた講座である。

小園優子さんのオープニングの歌(被災障害者の詞を作曲したもの)にはじまり、続いて被災状況に関するビデオを見た。部屋の側面には被害状況の写真パネル(矢守提供)を展示した。

まず高砂氏より避難所における地域住民の詳しい被災状況について報告がなされた。70%以上の家屋が倒壊し、多くの犠牲者を出したこと、ローラー作戦的に詳しく被災状況を把握した

ことなど、地域住民の避難場所である魚崎小学校に於ける救援活動について詳しく報告がなされた。特に行政や社会福祉協議会がもっている住民情報が手に入らず苦労があったこと、緊急時の食料や飲料水の確保の難しさがあったことなど、現場サイドから示唆に富む話を伺うことができた。企業ボランティアの果たした役割についても詳しく伺うことができた。学生ボランティアの受け入れと配属といった、ボランティアのコーディネーション（調整機能）の重要性についても指摘され、本当の地域コミュニケーションの創造がいかに普段から大切であるかについて学んできた。

小園氏からは、財団法人たんぼぼの家が震災後も地域の被災障害者児と連絡を取り合い、継続的に救援活動を行っていることについて詳しく報告がなされた。救援情報をさまざまな障害者児に送り続けるなかで、本当の助け合いとは「継続」であること。しかも弱者介護支援システムを行政や民間団体との連携で行わなければならないこと（ネットワークの大切さ）についていくつかの提言や提案がなされた。たんぼぼの家はいち早く、アメリカのカリフォルニア州ノースリッジの民間の災害対策協力機関（CARD）と連絡と取り合い、震災後のアメリカの民間救援団体の活動から学べるものを今回の障害者児の救援活動に活かしている。災害時に利用される学校、公共施設や建物のバリアフリー化や、ミニFMやコミュニティ放送などの整備が大切であると指摘された。

「社会福祉学」の立場から桂から二人の話に対するコメントを行った。震災はすべての社会システムを破壊するため、緊急時は地域での相互扶助の大切さ、そして普段からのコミュニケーションが如何に被害を少なくするかについて神戸市の真野地区の被害状況を例にとりながらコメントした。たまたま桂が当時東南アジアで在外研修期間でアジアからみたこの大震災の動きについてシンガポールでの危機管理の整備に向けての紹介を行った。

「社会心理学」の立場から、矢守がわかりやすいキーワードをいくつか掲げ、弱者に安全な社会づくりのあり方について有効な提言がなされた。「忘れてもおぼえている」「救助される人・される人・関係ない人」「活私創公」「餅やは餅や」「つながりのケア」など、人間の心理状況と社会システムとの関係を解きあかす格言をもとに、機知に富んだ話題提供がなされた。

参加者からの質問・意見

実際に奈良に避難してこられた婦人から、他府県へ避難した人々の実状について話を伺うことができた。また学生からはボランティア活動をしていく上における情報をどのように得ることができるか、また今もボランティア活動をしている団体等についての照会の依頼などがあった。

おわりに

参加した市民も学生達もこの公開講座を通じて多くの事柄を学びあうことができた。実際に震災を体験した者、今も救援活動に携わっている者でしか味わえない実体験を少しは共有することができたのではないだろうか。はたしてこの震災は我々に何を問わんとしているのか、ボランティアとは何であるのか、「希望とは（まさに）忘れないこと」であるということ再認識しながらこの公開講座を終えることができた。

震災はすべての学問領域に関わる出来事である。今回は社会心理や社会福祉の領域からの焦点の当て方であったが、この問題については、より一層学際的なアプローチが大学から地域社会に発信していかなければならない課題ではないかと考えさせられた。

今回の公開講座は、学生達の献身的ボランティアによって、我々教員と連携しあいながら成功に導くことができた講座であった。

（文責 桂）